



作・いしいしんじ 絵・かげやまなおこ

だいわ 第2話 トリボンと、ともだち

トリボンはふだん、ほんのすがたで、錦林小の図書館の、ほんだなのどこかにおさまっています。子どもや先生がいなくなると、そっとたなから抜けだして、表紙と裏表紙のつばさをひろげ、部屋のなかをばさばさ飛びまわります。

いついてみると、図書館は、じっさい、すてきな場所でした。おもったとおり、本をひろげさえすれば、たわわな写真のくだものや、1ページぶんのばかでかい小虫が、好きなだけ食べられます。アマゾンのジャングルでねむったり、パリの市場でアイスをなめたり、アフリカの大草原を全速力で飛ぶことだってできます。

ある日、ふつうより薄っぺらい本を引っぱりだそうとしたら、「くすぐったいぞ！」と本のなかから声がひびき、トリボンは驚いて、思わず本をとりおとしました。

ました。すると、なんてことでしょう。本が勝手にひらき、ぱさぱさと器用にはばたいてまいあがると、みごと机の上に着地したのです。

よくよくみると、ひらいた本の上に、顔がのっています。くちばしも、ゆびも、足もあります。頭には、白い毛が一本、くるっと輪をかいてはえています。

「わしは、じいトリボンじやよ。やっと会えたな」

と、ずいぶんくたびれた表紙を、ぱさぱさ動かして、
「ここにはほかにも、いっぱいお仲間がおる。みんな、おまえさんと同じように、ひなたのまどべの、本の上でねむってるうち、はさまれてトリボンになったんじや。わしもそうじゃった。おまえさんも知つてのとおり、本って、理想的なふとんじやからなあ」

じいトリボンの声があいづのように、ほんだながらつぎつぎと、本の姿の鳥たちが飛びだしてきました。ひらり、ひらり、机の上にとびおりると、「やあ」「やあ」「はじめまして」「これから、よろしくな」
子どものトリボン、強そうなトリボン、めがねのトリボン、イケメンのトリボン。とりどりの鳥たちがあくしゅのため、それぞれの表紙をさしのばしてきます。

「ありがとう、ありがとう」

みんなの表紙をタッチしながら、トリボンは笑いました。

「本つってほんと、最高のともだちだ」

ガラツと戸があいて、先生が図書館にはいってきました。一瞬、ぱさぱさぱさ、紙のこする、かわいた音がひびきました。

先生は部屋をみわたします。机の上には、なんにものっていません。先生は電気

を消し、戸を閉め、外からガチャリとかぎをかけました。ぱさぱさぱさ、なにかの
たてる小さな音が、また、どこかでひびいています。

